

---

「新約のきよめ」

第11章 御霊の満たし

## 御霊を持つことと満たされること

コルネリウスの記事は、聖霊のバプテスマは全ききよめを含むものである、という結論に私たちを導く。—御霊の満たしは全き聖化と同じ。

すべての内的更新は聖霊の働きの結果。

私たちが赦しを信じたとき、聖霊は生まれ変わらせる力をもって来て下さった。主イエスの血がすべての罪から私たちをきよめると信じたとき、聖霊はきよめる力をもって心に来てくださり、悪を追放し、神の愛で心を満たしてくださる。

しかし、聖霊を持つことと、聖霊に満たされていることは、まったく別のこと。

まず認識すべきことは、すべてのクリスチャンは聖霊を持っている、ということ。聖霊なくしては、だれも信仰者ではあり得ない。

しかし、それは満たされていることとはちがう。

## 聖霊のバプテスマ

ペンテコステは、弟子たちに大きな変化をもたらした。

彼らはみな、新しい高さに上げられ、新しい力が彼らを支配した。  
それは明らかに、聖霊の火のバプテスマがもたらしたものだ。

火のバプテスマは、彼らの内的腐敗性を焼き尽くし、全機能を補強し、神の力と生命をもって、すべての能力を十全に満たした。

聖霊のバプテスマは、新しい段階の開始。

著しい働きをしたほとんどすべての奉仕者たちは、回心後に明白で明確な恵みを受け、霊的生涯の新時代に入っている。

## 回心と聖霊のバプテスマの間が長くある必要はない

ベテルとペヌエル、エジプトと約束の地、十字架とペンテコステの間の失望に満ちた年月をむなしく過ごすべき理由はない。

使徒時代、回心と聖霊のバプテスマの間には、短い間隔しかなかった。

回心後には、ただちにこの恵みを紹介され期待するように教えられることは重要。

そのことにより、多くの信仰の後退を阻止することができる。

使徒時代の教会は、今日のクリスチャンたちが経験しているより、はるかに大きい度合いで御霊の満たしを持っていたことは、「使徒の働き」に明らか。

それを持っていないとしたら、問題は「神は与えてくださったか」ではなく、「われわれは受けたか」。

私たちはまだ御霊の時代に生きており、約束は今もなお有効であるから。

## もたらされ方にはいろいろある

御霊の満たしを、特定のもたらされ方と混同しないようにする必要がある。

御霊は、場合によって、露が下るように、やさしい夏の雨のように、力強い烈風のように、来られる。

罪が赦されるのに多様性があるように、聖霊の恵みにあずかるのにも多様性がある。それがどのようなものであるかは問題ではない。

どんな様式であっても、聖霊が満たされるとき、たましいのすべての部屋は光に満ちあふれ、不潔な汚れは残りなくきよめられる。

満たされることが、この世で最も困難なことであるかのように語られたり、ふるまわれたりしているが、神はひとりひとりの信仰者に聖霊を与えたく思っておられる。